

コロナウイルス対策に対する礼拝の理解について

蕃山町教会 長老会

2020年5月

まず教会の礼拝は、一人一人が神とお会いするところであり、そこで神の言葉が語られ、救い主の体に与ることができる空間であり時です。教会が信仰共同体、聖餐共同体と言われる所以です。従って、救われたクリスチャンであるならば、私を救ってくださった神さまに対しては、「礼拝に行かない」という選択肢は本来的には存在しません。誰かに強制されて行くわけではなく、ましてや自粛要請されたから行かなくなるのでもありません。その上で、礼拝は不要不急なのか、を考えなければなりません。

十字架の苦しみを受けてまで愛してくださり、私の罪のために私が受けるべき審きを一身に担って十字架で苦しまれた主の愛に感謝しお応えできるのは、ただ礼拝しかないことは明らかです。

また、自覚しようとしまいと、罪（神に背くこと）を犯し続ける我が身に、悔い改めの時を与えてくださり、あなたの罪は赦されたと赦しの言葉を聞くことができるのは、ただ礼拝のみです。

そして、主の体に与り、永遠の命の喜びの祝宴を先取りさせていただけるのは、ただ礼拝のみです。だからこそ、礼拝は「不要」とは決して言えない、というのがすべてのクリスチャンの基本的な立場と言えます。従って、私たちの教会は、可能な限り教会を開き、礼拝は守り続ける、ということの基本線としています。

しかしながら、現在私たちの教会、のみならず世界が置かれている状況は、クリスチャンにとって必要な礼拝が、感染拡大の場になってしまうかもしれない、という危険と隣り合わせの状況です。それゆえに、礼拝への参与を希求しつつも、隣人のために「不急」であるという判断をなさざるを得ないこともあります。そしてその判断は、私を救ってくださった神さまと自分との対話である祈りによって決められるものと言えます。「不急」であるとの判断は、誰かに強制されてではなく、ましてや教会（長老会）の要請によるものでもありません。大切なことは、この環境下にあっては、神さまとの祈りのうちに決めたことは、礼拝に集うことであれ、休むことであれ、それが御心だと信じることであり、教会（長老会）はその判断を尊重すべきものと理解しています。

すべての者が、一片の不安もなく、共に礼拝に集い、共に聖餐に与る喜びの日が必ず来ることを信じて、祈りつつこの困難な時代を生きて行きたいと思えます。ここにも主が共におられる、ということを感じて。